
我らが民間警察！

テン

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我らが民間警察！

【NZコード】

N4604X

【作者名】

テン

【あらすじ】

公務員として働く主人公。

でも、ある日突然『民間警察』へと出向が発令される。

戸惑う主人公。

階級が高いわけでもなく、これと言つた何かがあると言つわけでもない。なぜ……？

しかも、出向先は悪名高い『？日本民間警察』。

右も左もわからないまま、流され型の主人公は新しい職場へと行く！

え、なんか出向になつたんですけどー? (前書き)

初投稿です。

一応、暴力的な表現は後々出でてくると思います。
それと世界観の説明を出そうと思つてゐるのですが、僕の文章能力
が拙いのでクドクなること請け合ひ。

文章能力は低めなのでご注意。

誤字脱字、文の意味がわからない、もつとわかりやすい表現がある
よ、などありましたら教えて頂けると幸い。

以上の事をお許しいただける方はよろしくお願ひいたします。

注意：亀より遅い更新になるかもしれません。

え、なんか出向になつたんですね…?

1.

「 は?」

思わず上司の前にも関わらずそんな声をあげてしまった。
そんな俺に上司は何の表情も変えず、不機嫌そうな顔で一枚の紙を渡す。

「 ……えーと、どうあえず喜んでおけ」

ポンと肩を叩かれる。

上司の顔にはありありと今回の俺の出向についての不満が見て取れる。

「 あの、『冗談ですよね?』

自分でもわかる。顔の筋肉が引きつっている。

最後の希望をかけて聞くが、上司は顔をゆっくりと左右にふった。
目の前がグルリ反転し、この小さな会議室がどこまでも広がるような錯覚。

……ああ。どうしてこんな……。

がんばって警察学校を卒業して、これから国家公務員として将来安泰な未来を描いていたのに……！

俺の手には、こう書かれた公式な書類が握られている。

『九条悟』上記の者を『株式会社 日本民間警察』へと出向する
ものとする。

え、なんか出回しなつたんですねーー? (後輩)

お読みください、ありがとうございますーー!

意外と好待遇？（前書き）

あ、一応、世界観は現代日本がベースではありますが、ちょっと違う世界です。

意外と好待遇？

それからは大変だった。

辞令に伴う仕事の引継ぎ、新しい職場への顔出し、警察の独身寮からの引越し。

なぜか民間警察でありながら殉職率の高い職場での仕事内容は厳しい事も予想されるので、辞めようとも思った。

……が、ただでさえ求人が、仕事がない世の中で、そのせいで犯罪率が上がつて警察の手が回らなくなつて民間警察が作られた。そんな情勢の中で仕事があるだけマシだと、明日の飯にも困る生活は想像さえしたくないから少しだけ頑張つてみようと思つ。仕事なんていつでもやめるさ。なんて、強がりを心の中で思いながら。

驚いたのは？日本民間警察 略して『民警』の社員に与えられるのは、今までの警察の独身寮からは考えられないほど新しくて豪華で広いアパート。

最初は幹部用に借りられたものかと間違えているのでは？ と、会社に問い合わせたほどだ。

そして、新しい職場の上司が小柄の可愛らしい女性であったこと。正直、好みすぎる。名前を浅生 繙 あさお つづり 20代後半と言つ話だ（詳しい年齢までは教えてくれなかつた）。

俺と同じく、警察からの出向との事。

少しだけ新しい職場に明るい期待を感じた。

……と、言つのも過去の話。

現在、俺は全体的に緑色とか黒とか茶色がまだら模様になつた服を着込んでいる。

所謂、迷彩服とか呼ばれるものだ。なぜ？

そして、基礎体力訓練と呼ばれる地獄を3ヶ月ほど経験して、返事になぜか『レンジャー！』とか単体で叫んだり、語尾につけたりしなければならない先よりも地獄の部隊に2ヶ月ほどいる。あれ？ なんで自衛隊に…わからない。

結局、あの綺麗で豪華な大きな部屋で過ごしたのは1週間ぐらい。今は野山の乾いていて寝やすい所が俺の寝床。

天井なんて広くて高くて。

壁なんてない辺り一面が俺の部屋！ 文字通りに、だ！

風通しだって悪くない。ただ、虫が沢山なのと雨が防げない、頻繁に教官が襲つてくるのが難点かな？ あつはははははははあ！

……騙された！ チクショウ！

極度の疲労と睡眠不足で妙なハイテンションなのに、体は鉛のように重い。

時折、思考の片隅に浮かぶ『倒れてしまえば』『あの高いところから飛び降りれば』なんて後ろ向きな誘惑に負けそうになる。

その度、教官の叱咤激励といつ名の罵詈雑言を『やれます』『レンジャー！』と機械的に返す。

……本当に。マジで。俺つて警察官じゃなかつたっけ？

そう言えば、この会社の歓迎会で、自衛隊からの出向だという人がちらほらいたような気がする。

笑いながら朗らかに交わした冗談みたいな挨拶と、酒に酔わされて気づかなかつたが。

あの時に気がつくべきだったんだ。

何で民警に自衛隊からの出向された人（と、のたまうヤツが複数）がいるの、とか。

会社の説明の時に支給された装備のものしさとか。

拳銃以外の殺傷能力の低い、ティザーガンとか熊さえも怯む催涙スプレーとか。

制服が何でか、自衛隊の野戦服を紺色に染めただけで何一つ装飾が変わらない異常性とか。

『拳銃以外、警察よりも装備いいじゃん』なんてはしゃいでいた俺を殺してやりたい。

これならあの犯人確保の時、死ぬほどの思いをしなくても良かつたじゃん、なんて阿呆な事を抜かす俺を粉碎してやりたい。

「もう限界か！？ 根性無えのか！？ 股にぶら下がってるのは飾りか！？ やる気が無えなら帰れ！？ 母親の垂れ下がったオツパイでも吸つてろ！？」

耳元での怒声にハッと気がつく。目の前には緑色が。青臭い。
……どうやら氣を失つて倒れていたらしい。

体が鉄になつたように硬い。背中の装備が数字以上に重く感じる。
「まだやる気か！？ 落伍しちまえ！？ 貴様みたいな女みたいなヤツはこの部隊には要らん！？」
続けざまにかけられる罵詈雑言に叫び返す。

「まだ出来ますレンジャー！」

会社辞めよ。

辞めてやる。

そんな事を考えながら歩き出す。

……明日はひとつだ。

意外と好待遇？（後書き）

7時から仕事なのに現在4時とか……。
風邪引いてる体に鞭うつてどうする気だ、自分よ……。

地獄の先には何があるへ（前書き）

超亀更新もつしわけあつません……！
それと、なんでだかお気に入りが1件登録されてました……！？
ありがとうございます……！
テンションだだ上がりですよー！
これからもがんばって行きたいと思こますのでヨロシクお願ひします！

地獄の先には何がある？

地獄の研修を終え、2日の休暇をもらえた。

全日程を終了した際に、鬼の教官が急に入らしい態度で「電話だ」と没収されていた俺の携帯を手渡したのだ。

泥のように混濁した意識の中、もう遠い時に出会ったような気がする浅生さんがそう告げたのだ。

ああ、終わった。そう思った途端、急に体から力が抜け意識が閉じた。

……けたたましく鳴る電子音にビックリして跳ね起きる。すわ何事かと、身構えたらそれは俺の携帯の着信コール。ほっと緊張を解く。……訓練の賜物か、徒手格闘の体勢をとつて、自分自身に苦笑しながら。

電話は上司である浅生さんからの『モーニングコール』。はて？ 今日は休日ではと、疑問を覚え聞けば、何故だか今日はその出勤日だと言つ話だった。

あわてて日付が表示されるデジタル時計を見て愕然とする。確かに出勤日。記憶のある口から2日経つている。

……嘘だろ？ マジで？ 寝てたら2日経つて、どんなタイミングワープ？

出社する時間までは幾分余裕のある時間だけど、せいぜいシャワーを浴び準備をするぐらいが関の山だろう。

……と、言つか。ここは。俺のアパート？ 俺の部屋？ なんでベットに寝てるんだ……？ しかも、スエットに着替えてるし……。

様々な疑問で頭が軽くパニックになる。

……怖え。一番新しい記憶ではあの電話の最中強烈な脱力感に襲わされて からの記憶が無い。

無意識に帰ってきたのか？

寝すぎて痛む頭は呆けていて、俺を気にかける浅生さんの甘くも威厳のある声で一気に覚醒する。

「悪いね。あつちで気絶した君を勝手に運んだから。それと部屋にも上がりせてもらつて、適当に着替えさせてもらつたから」

「えええ！？」

鍵はどうしたんですか、とかの疑問は後回しで俺の脳裏には小柄な浅生さんが俺を負ふつている姿が思い浮かんだ。

寝ている俺を……？ いやいや、俺だつて成人した男。

そんな俺を抱ぐ姿がどうにも想像できない。

友人には体の線が細いとはよく言われる俺であつても体重は70kgぐらいあるんだぞ……？

でも……。あの研修を受けていたら……ありえそう。うわあ、何かシユール。

「あれ、起きてる？ で、また悪いんだけど、達夫達に……ああ、

君の先輩達ね、名前覚えてる？

に、頼んだんだけど部屋荒らしてなかつたかい？ あいつらはお

調子ものだから

ああ、なるほど。浅生さんのイメージが壊れなくてよかつた。

綺麗な眼鏡の似合う知的女性が実はマッチョとか、そんなキャラクター付き合い方がわからない。

バツと部屋を見渡し異常が無い事を伝えると、「あ、私も準備をしなければならないから。

遅刻しないように」ブツ、といひちらの返答も聞かず通話が切られた。

……ああ、良かつた。

浅生さんのイメージ通りで。

細身の文系マッチョの可愛い上司などという存在との付き合い方なんてわからないからね。

筋肉痛で痛む体を誤魔化し、久しぶりの熱いシャワー。

7ヶ月ぶりのスーツに変な感慨を味わい、アパートの鍵を閉める。
……なんでなんだろうなあ。

訓練中に何度も辞めようと思っていたのに、今ではもう少し頑張つてみようかななんて考えてる。

不思議なもんだ。

やっぱり可愛い上司（浅生さん）の声を朝から聞けたから？

そんなつもりは少しも無いけど、何となく。

新しい生活にワクワクしてるのは自分がいる。

「いい天気ですね」

歩きながら先輩であり相棒の桑原 達夫さんと巡回をする。
街を見回つて犯罪抑止をするお仕事の最中です。

民警での仕事は驚くほど『普通』だった。

担当する地域を巡回し、犯罪の未然予防。

事件があれば急行し、犯人捕獲とか被害拡大防止とか。

公警と違う事は、

1・捜査権が無い。

2・拳銃所持が許されない（例外を除く）。

3・道路交通法違反を初めとする車両関係の犯罪取締りができない（例外あり）。

大雑把に言つてこんな感じ。

あくまでも強盗とか盗難、殺人などの重犯罪を『予防』する事がお仕事らしい。

この『予防』という所がミソで、実際に重犯罪が起こった場合 俺達民警の出番はなくて

全て公警へ丸投げする。

つまり実際には民警は『少しの警察権限を持たされた警備会社』と

差して変わりない。

実際に昔の警備会社がそのまま民警になつたものも多々ある。
……なんでこの会社、殉職者があおいの？ そもそも大事件とか銃
刀法に関わる民間警察では手に負えない事件は法律上、
出来ないことになっているのに。

民間警察（法）は犯罪未然防止の意味が強いのだ。
とは言え、事件が起きたら急行しなければならない。
どんな事件が起きているのかわからないから。

その後で、民警が出張るのか公警が出張るのか決められる。
民警の手に負えなければ、丸々 公警に投げる」とになる。

……あ、ちなみに。

俺みたいな出向組は管轄する警察署に前もって届けて、受理されれば拳銃を貸してもらえることになつていて。

一応は身分上、警察官だから。

でも、1時間毎の連絡と何十枚もある書類を提出しなければならな
いから、そんな面倒な事はしない。

「お前、何ボーッとしてんの？」

考え込んでいたら、先輩であり相棒の桑原 達生さんに声をかけら
れた。

見た目、170センチ中盤ぐらいの身長のチャラい感じの優男。
髪だつて茶髪で……。これで自衛隊からの出向だと言うのだから驚
きだ。

本人曰く、『俺、これでも格闘肩章もちだから。脱いだらスンゴイ
よ』との事。

……格闘肩章つてなに？

「ええ。……いや。公警に居た時にこの会社のいやな噂を聞いてい
たもので。

噂とは全くあてにできないなあ、と

「……ああ～。アレか。殉職者続出の、とか」

少し考える仕草をして桑原さんは言ひ。

笑いながら言われたその言葉に『ソレですね』と、素直に返す。

「思つたより良い会社だろ、ウチは」

ははは、と笑う。「ま、その内わかるさ

意味深に、続けて言われた。

……なに？ 何か思わせぶりな事言つちやつてんですか。

そんなネタふり勘弁ですよ。

小心者の俺がビビッちやうじやないでですか。

と、その時。タイミングよく無線から無機質な業務連絡を告げる音が鳴つた。

……え、フラグ立てちゃつた？

ビビリまくる俺とは違い、桑原さんは冷静にイヤホンを耳の耳に押さえつける。

俺の耳にも同じように無線機から伸びたイヤホンがあるわけで……。これは出勤している全員への通達だった。

『本日、17：00（ひとななまるまる）時、特例B項が発生した模様。以降を持つて全職員は会社待機を命じる』

桑原さんをチラリと見れば、一や二やとドドドドを未ながら無線機にしつこい位に指をさしている。

『キタキタ』と、口を 声を出さずにパクパクと動かしながら。何て憎らしく……！

無線が終ると同時に桑原さんはやたらと良い笑顔で俺の方をバンバンと叩く。

「やつたな！ ウチの会社の真髄だぜー。配属数日でラッキーだな

！ 殉職すんなよ！」

チクショウ。憎しみで人を殺せたら……！

何だよ、殉職するなつて！？

「どんな仕事だよー。

この会社は民警だよね？！」

「とつあえず、会社もじるや」

相変わらず、ニヤニヤとした表情でこちらを睨み繆原さん。
殺意さえ覚える。

いくらどんなことをするのか聞いても答えてくれない。

そんな事をしながらも、会社への距離はだんだんと近くなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4604x/>

我らが民間警察！

2011年11月21日14時31分発行